

群 教 セ	G01 - 03
	平 27. 257 集
	国語一中

# 中学校国語科における 読む力を高めるための古典指導の工夫

— 「ペア音読」をもとにした「ブックトーク」への取組を通して —

特別研修員 橋本 淳一

## I 研究テーマ設定の理由

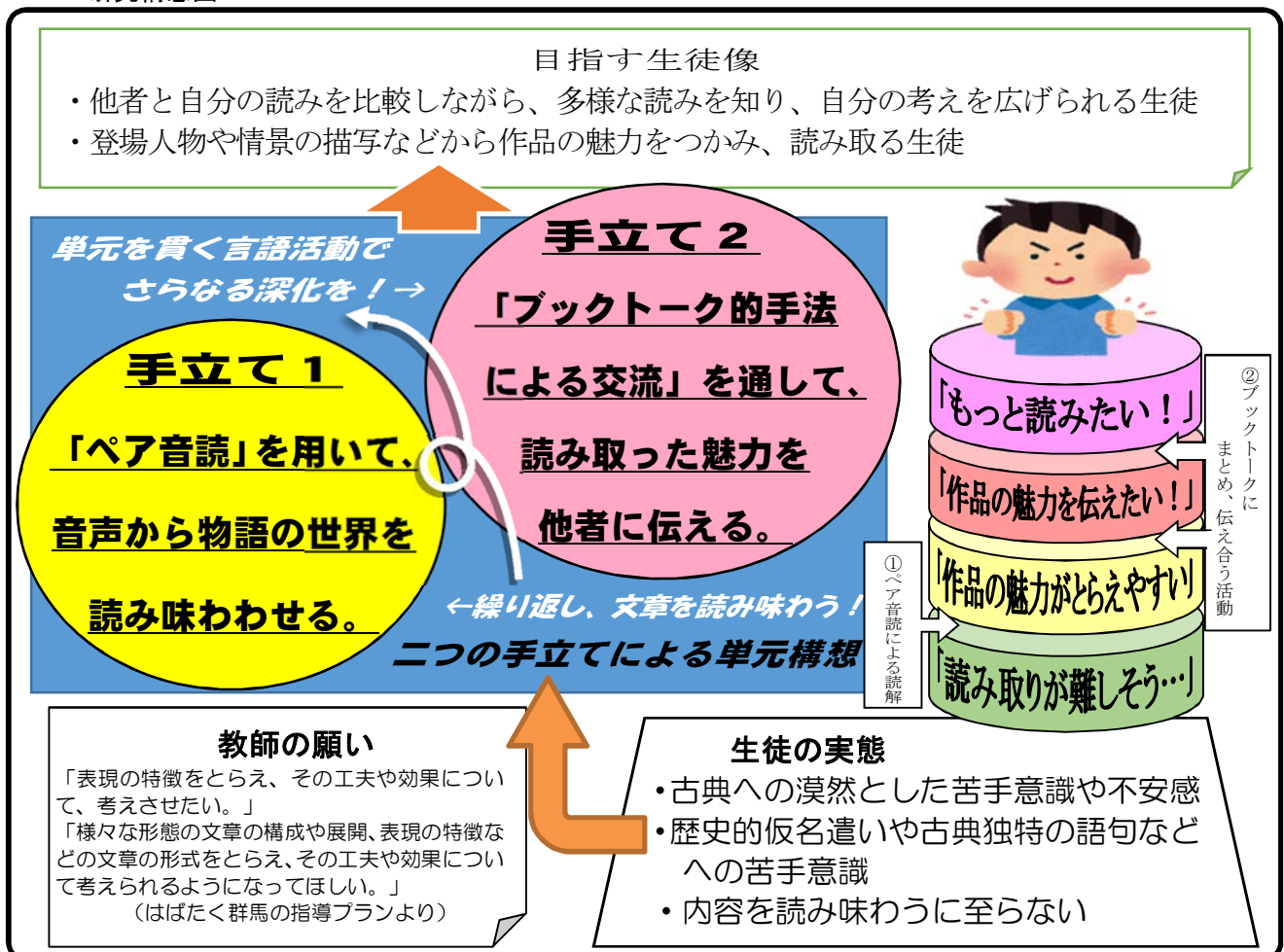
小学校と中学校の指導内容の違いには、本格的な古典学習が加わることが挙げられる。所属校の生徒も古典の学習開始当初は目新しい古典作品に興味を持ち、期待感とともに学習を始める。しかし、歴史的仮名づかいや古典独特の語句や言い回し、表現技法と学習を進めるうち、知識や技能の習得のみに関心が集まる傾向が見られる。中には古典への苦手意識を根強く持ってしまう生徒も存在する。

そこで、「ペア音読」を繰り返して音声化しながら想像をふくらませ、楽しく作品理解を進められるような授業を構想したいと考えた。そして、その読み解いた作品を「ブックトーク」の手法を用いて他者に紹介するという単元を貫く言語活動を併せて設定する。これにより、作品が持つ主題や魅力を読み取って他者に伝えるという目的意識・相手意識が明確になるであろう。また、古典作品においても、既習の読み方が活用できることが分かり、より主体的に読み取っていくことができるであろうと考えた。

ペア音読とブックトークという二つの手立てを併せて取り入れることにより、生徒の読み取って理解したいという意欲が持続し、対象となる古典作品のよさを読み味わう力が伸長すると考え、本テーマを設定する。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

### (1) 「ペア音読」を用いて、音声から物語の世界を読み味わう

ペアによる交互読み「ペア音読（丸読み、原文と現代語訳の交互読み）」に繰り返し取り組ませ、読み取ったことをペアの交流の中で深めさせる。音読の工夫をすることや、その工夫の根拠についてペアという最少人数で交流し合うことが、文脈や登場人物の心情の読解につながっていく。また、単元を貫く言語活動として、単元の導入段階からブックトークを行うことを生徒が知っていることにより、生徒はペア音読による読解に目的意識を持って取り組むようになる。

**【授業実践 1】** 『詩四編』中に掲載されている近代詩から一つを選び、隣同士の二人で「ペア音読」を繰り返し、朗読の工夫や詩に描かれている情景について交流した。現代語訳が存在しないので、一文ずつの交互読みの工夫を通して、内容理解を目指す。

**【授業実践 2】** 『竹取物語』の“五人の貴公子”に関するエピソードの、原文と現代語訳を掲載したプリント4種類から一つを選び、隣同士の二人で「ペア音読」に取り組んだ。1単位時間すべてを、ペア音読の時間として使い、作品世界をじっくりと読むことを目指す。

### (2) 「ブックトーク的手法による交流」を通して、読み取った魅力を他者に伝える

個やペアで読み取った作品のテーマ・作品内容・作者の思いを、ブックトーク原稿に表し、他者に伝える活動を行う。原稿を複数人で練り上げる活動において、作品のおもしろさが、より伝わるものになったかという視点で検討する。そのことにより、相互の読解を確認し、深めることができる。

**【授業実践 1】** 「ペア音読」で読解した詩をもとにしてブックトークの手法で作品を紹介し合う。読解した詩の内容（作品主題）をまとめ、それをもとにしてブックトークのテーマを設定する。さらに、国語資料集からもう一つ、同テーマの詩を選んでペア音読を行う。テーマに基づく両作品の紹介を併せて、ブックトーク原稿を練り上げていく。

**【授業実践 2】** 授業実践1と同様に、ペアでブックトークを作成する。その後、ペアで一度完成させたブックトーク原稿を、2ペア一班のグループでのブックトーク原稿に練り直すという活動を行う。二つの原稿を一つのブックトーク原稿に練り上げる活動を通して、作品の読解についての多様な考えを知るとともに、自己の考えを深めることをねらいとする。

## III 研究のまとめ

### 1 成果

- ペア音読により、理解のための音読を繰り返すことで、古典作品への苦手意識は軽減されてきたと考えられる。多くの生徒が古典の学習に親しめた様子が事後のアンケート等に見られた。
- 「ブックトークで作品の魅力を紹介し合う」という目的意識を持たせ、場面の展開や登場人物の描写等に注意しながらブックトーク原稿作りや、ペア音読による交流をさせたことは、生徒の、作品の魅力は何か、主題（テーマ）は何かを読み取る力を高めた。
- 近代詩や「竹取物語」など、古典作品を読むことの活動で本実践の手立てを用いたことで、生徒は、古典作品にも、現代文と同様な読み方を適用することができた。また、そのことにより、作者や登場人物の人間らしさ、現代に生きる自分たちとのものの見方や考え方の異同などについて、自分の考えを持たせることができたと言える。

### 2 課題

- ブックトーク原稿の作成が始まると、本文の叙述に戻って読解を再確認する場面が少なくなる傾向がある。本文の叙述に立ち返らせながら読ませることが肝要である。
- ブックトーク発表の場で交流し合う場面で、多様な考えに気付かせた後、それらの中から自分の読みはどうであったかを再考させる場面が必要である。ペアからグループへ、そして個での思考へと戻らせることが、一層の読解の深まりにつながる。適切な問い返しが必要である。

## <授業実践>

### 実践 1

- 1 単元名 「『詩四編』をもとにして、ブックトークをしよう」  
教材名 『豊かな言葉 詩四編』（第1学年・1学期）

#### 2 本単元及び本時について

本単元では、荒川洋治氏が詩について自らの体験を語った文章と、それぞれの詩の読解を並行して行う。近代詩の様々な魅力が味わえる題材である。生徒は、これらの詩の中の一編について、その魅力や楽しさをブックトークの手法で紹介するため、音読や意見交換を繰り返しながら、詩を読解していく。ブックトークで作品の魅力を紹介するという目的意識を持つことで、より作品の多様な読みを知り、深まりや味わいのある読解に深化させようという生徒の意欲を喚起する。また、読解の手立てとして「ペア音読」を用いる。生徒は、同じ詩を読む生徒同士でペアを作り、「交互読み」「原文音読と現代語訳を交互に分担しての読み」などの「ペア音読」を繰り返していく。その中で、文語体の音読、発音や歴史的仮名遣いに親しむとともに、文脈から内容理解に迫るための交流を図る。これらの活動を通して、本単元のねらい「文語詩・口語詩の分類や表現の特徴について理解させ、自分の考えを持たせること」「自己のものの見方や考え方を広げること」の達成に迫る。

#### 3 授業の実際

- (1) ブックトークで詩を紹介し合うことを知る（図1）。

生徒のうち19名は、ブックトークの手法そのものを知っており、さらに17名の生徒は、ブックトークに参加したことがあった。初めての活動であるため、生徒は不安の色を示したが、近代詩を対象としたブックトーク的な手法の活用という点には、ほとんどの生徒が意欲の高まりを見せた。

- (2) ブックトーク用シートを利用して、ペア音読に取り組む。

詩の内容や作者・登場人物の心情、情景について意見交流し、まとめる。内容をもとに、朗読の仕方も決める（図2）。



図1 ペア音読の説明を受ける

図2 ペア音読とブックトーク原稿を兼ねたワークシート（A3版）

(3) ペア音読で得られた読解を生かして、ブックトークの原稿をまとめる。

読み取った内容から作品のテーマを決め、そのテーマに沿った、別の詩を国語資料集より選ぶ。選んだもう一つの詩もペア音読により、交流しながら読解を深める。そして、両作品の読解を併せて、ブックトークの原稿として練り上げていく。

(4) 完成したブックトークの練習をする。

**生徒の活動の様子**

(1) ペア音読の場面

短い時間ではあるが、意欲的な取組が見られた。朗読の工夫を書き込む活動も、4月当初の単元である「のはらはうたう」において既習であったため、スムーズに活動に臨んでいた。繰り返し音読し、詩中の登場人物や作者の心情を音声として感覚的に捉えたり、意味を考えたりし、プリントに記入することができた(図3)。

(2) ブックトーク原稿の作成

各ペアで詩を読み取り、ブックトークのテーマを決める。そのテーマを作品主題として持つ、もう一遍の詩を国語資料集から選び出し、ワークシートに記入する。ここでは、教師が印刷して準備しておいた本文を貼付させた。その後、伝えたい両編の詩の魅力や見どころを、ペアで明確にさせた(図4)。

(3) ブックトーク発表会

教室内の4箇所を発表場所を設置した(1箇所で4ペアが発表)。発表場所を複数にしたことで1箇所あたりの聴衆が少人数になったので、緊張感が少なく、発表が苦手な生徒にも取り組みやすかった様子である。活動後、生徒のワークシートには、「同じ詩に、色々な捉え方がありおもしろかった」「友達が皆、詩の内容についてよく考えていることが分かり、すごいと思った」といった記述が見られた。



図3 ペア音読の様子



図4 ブックトークの原稿を作成する様子



図5 ブックトーク発表会の様子

4 考察

- ペアで繰り返し音読するという平易な活動から取り組めるため、生徒が意欲的に学習に臨み、古典作品への抵抗感を軽減する効果があった。
- ブックトークの手法を用いて詩の魅力を伝える活動では、自分たちなりの読解を、より良く伝えようという意欲を持てた生徒が多かった。難解な詩もあったが、「自由な発想で良い」と伝えてからは、生徒たちがそれぞれの詩に思い思いの読みを見出し、ブックトークのテーマもその印象を生かした言葉とすることができていた。
- ペア音読の際、聞き取ったことのメモにかかりきりになってしまう生徒がいることが課題であった。より、音読の部分を重視して、音声の中から得た読解のヒントと、文字からの読みをつなげていけるような言葉掛け等の支援をしていきたい。
- 学習活動の内容の説明に多くの時間を割いてしまったため、生徒の活動時間が不十分であった。十分な活動時間の中で、音読の工夫を繰り返しながら読解したことを練り上げられる学習活動にする必要がある。



## 実践 2

- 1 単元名 「『竹取物語』内のエピソードを、ブックトークで紹介しよう」  
教材名 「蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から―」（第1学年・2学期）

### 2 本単元及び本時について

「竹取物語」は昔話としてなじみの深い「かぐや姫」の元となった物語である。中学1年の生徒でも物語の全体像が捉えやすい物語文だが、反面、表層的な内容理解に終始してしまい、作品全体の主題やテーマ性を深く読み取るという姿勢につながりにくいという危惧もある。そこで、今回の活動では、あまり知られていないようなエピソードを音読、読解する活動を通して、物語の本当の主題やおもしろさを読み取れるようにした。単元を貫く言語活動としてブックトーク（※ブックトーク的手法による交流）を設定することで、生徒が目的意識を持って古典の世界に触れ、読解を進められるようにする。

主題を含めた作品のおもしろさを他者に伝えるブックトークにするためには、作品内容を端的に表現したテーマを設定する必要がある。生徒はそのテーマに沿って作品内容を伝えるために、意欲的に読解に取り組む。また、その読解の過程における手立てとしてペア音読を用い、音声で繰り返し物語を味わい、表現を工夫させる。そうすることで、感覚的に作品世界に浸るとともに、一語一語の持つ意味や文章構成上の特徴等を分析的に捉えられるようになる。ペアという最少人数でのグループ活動を通してそれらの読解を気軽に意見交換できるであろうと考えた。

さらに本単元では、ペアのブックトークを、同じエピソードを担当したもう一つのペアと練り直し、4、5人でのブックトークに再構成するという活動を取り入れた。既成概念にとらわれず、多様な読解を聞き合うことで、より多くの考え方に触れさせ、自分の見方、考え方を広げさせるねらいがある。

### 3 授業の実際

- (1) 竹取物語のエピソード四つのうち、いずれかを担当し、ペア音読に繰り返し取り組む
  - ・ 単元計画のうち、丸1時間を割り当て、十分に音読する時間を設定する。
- (2) ペア音読で読み取った作品の魅力や作者の思いを、ブックトーク的手法でまとめる（図6）。
  - ・ 前時に読み取った内容をペアとの交流の中からまとめさせる。
  - ・ ペア音読を繰り返しながら、ブックトークの原稿完成に向けて目的意識を持って読ませる。

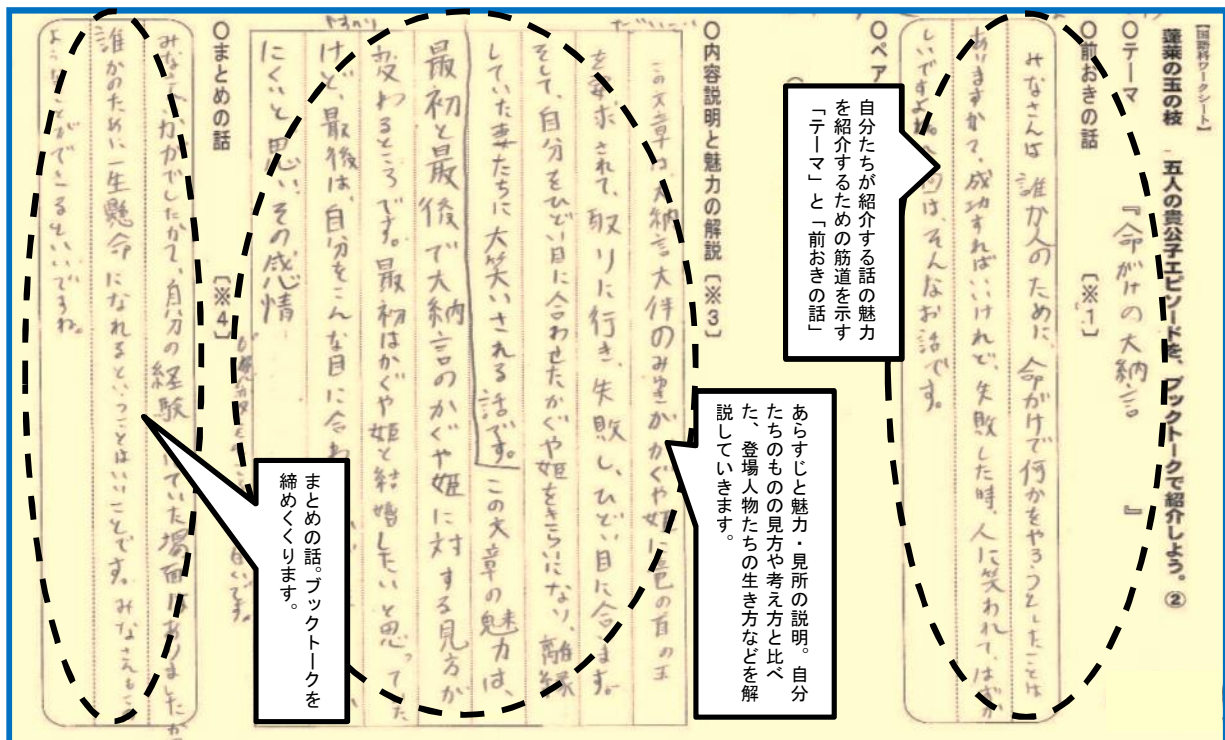


図6 実際に記入されたブックトークのワークシート

(3) ペアのブックトークを、さらに2ペアで練り直す。

- ・授業実践1のブックトークで、同じ詩にも多様なテーマ設定や読解がなされていたことを想起させ、今回は2ペアでのブックトークに練り上げる活動をすることを伝える(図7)。
- ・事前に各ペアのブックトーク原稿を回収しておき、図9のように2ペアのブックトーク原稿が上下に並んでいるワークシートを配布する。生徒は、これをもとに、原稿の練り直しを行う(図8)。



図7 導入の場面



図8 2ペアで練り直しを行う様

**この時間の感想**  
 「あべの大臣についての考え方がいろいろだった。そして、みんなでまとめた方が、よいブックトークになりそうだった。」

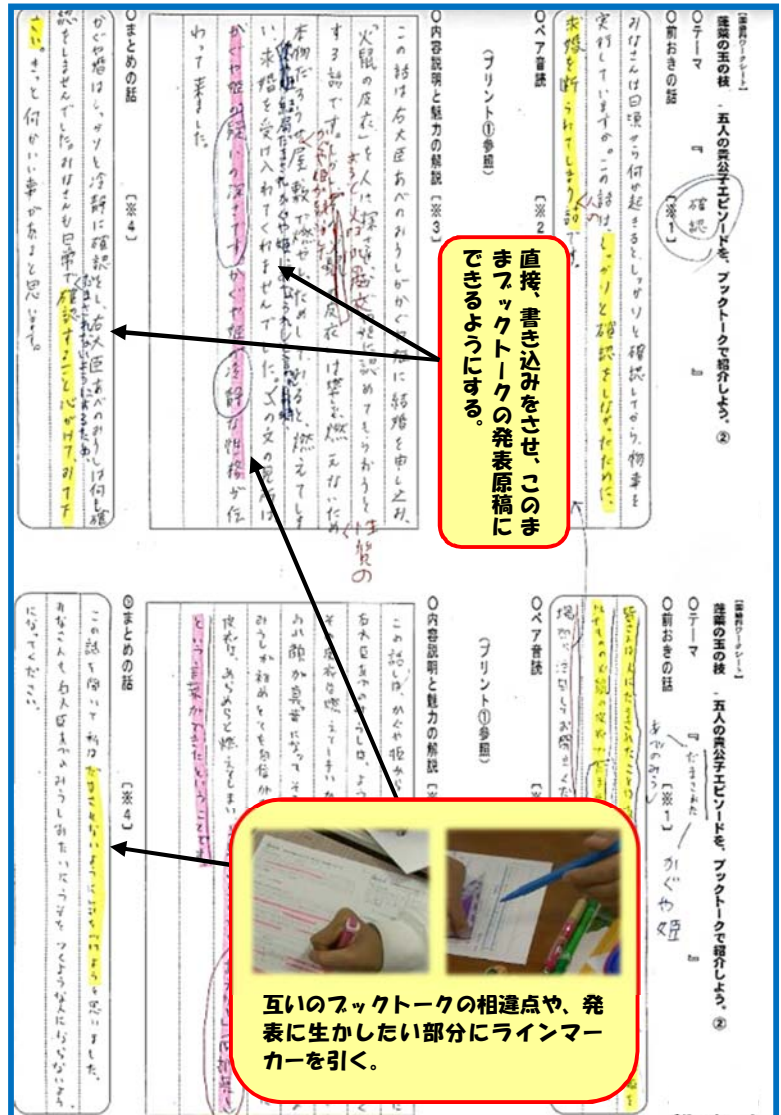


図9 ブックトークの練り直しに利用したワークシート

4 考察

- ブックトークそのものが既習事項となっていたため、単元を貫く言語活動としてのブックトーク的手法を生徒がイメージしやすかった。ペア音読で読解したものをブックトーク原稿にまとめるという学習活動を通して古典作品を読み深めていくことへも、スムーズに移行できた(図7)。
- 生徒が意欲的に取り組む姿勢が多く見られ、ブックトーク的手法の可能性を感じる事ができた。ブックトークの原稿を作成していく過程で、生徒は言葉を手がかりにしながら文脈をたどり、自分たちが伝えたい作品の魅力について、視点を定めて読み返していた。
- 一度完成したブックトークを2ペアで練り直す活動では、多様な考えに気付くことができたという点で有効であった。反面、「原稿を一つにまとめる」という活動があったことにより、個やペアで考えたものを作成し直すという表層の活動に目が行ってしまう生徒も見られた。2ペアでの練り直しの後、再びペアに、また個に戻って再考させ、自分の読みを確認する場面があっても良かった。